

廢名『莫須有先生伝』訳稿 (三)

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan : A Transportation (3)

張 雪晶*・山田 史生**

Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要 旨

廢名 (1901～1967) の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廢名集』第2巻 (北京大学出版社) 所収に拠る。

キーワード：廢名 莫須有先生

第六章 薄っぺらなおばさんについて

莫須有先生はふたつならべたレンガのうえにしゃがみながら、悠然として南山を見るといったおもしろい¹、どこまでもひろがる世界をみはるかし、うれしそうに語る。

「なんてすばらしいんだろう、もっとはやくやってくればよかったなあ、ほんとうにすばらしいところだもの。吾輩はこの田舎の住まいのことを便所から山をながめる部屋と名づけることにしよう。ただ惜しむらくは吾輩の書く字ときたらヘタクソもよいところだし、もちろん字など書かなくてもよくって、ここが通じあっていればよいわけで——われらが莫須有先生の印は、十元くらいかけて彫ってもらったもので、いまだに朱肉すら買っていないんだけど、もっとも印なんて使いみちもなくて、というのもあんまり大きすぎるのをつくっちゃったもんだから。そもそも吾輩は生まれてこのかたひとになにかを告げるということが好きじゃなくて、好きなのはただ日記をつけることだけで、だからというか吾輩の文章ときたら日記といっしょでしょ？ 吾輩ひとりだけにしかハッキリしたことはわからない。もし歴史における藝術を鑑賞するひとたちが吾輩がもっているような冒険をする能力をもっていたならば、あらゆるハッキリしないことはなくなっただろうにねえ」

「莫須有先生、あんた便所のなかでなにをしゃべってるんだい？」

「なんにもしゃべってなんかいらないけど、これはまっ

たくあなたのほうがよろしくないなあ、というのも吾輩はまだ手をあらってなくて、正々堂堂たる自己として世間に顔むけができないのだから、あなたはまだ吾輩に問いかけてはいけないのだよ——しまった、なんてこった、吾輩はなんの気なしに歩いているアリのふんづけて殺してしまったのではないか。アリは死ぬべくして死んだといわざるをえないとすれば、これがやっこさんの運命であったということなのだろう。それでなにか不都合でもありませんか？」

莫須有先生はうなだれて便所からでてくると、手をあらうどころか、手をじっとながめていたかとおもうと、いきなりビックリ仰天して、というのも露天の便所のなかの壁がいまにもくずれてきそうだっていうことに気づいたからで、さいわい便所からでたあとだったから助かった。いったいこれはツギがあったといえよいいのか、それとも用心しろということなのか、と独り言をいって独り笑いをする。

「こんなところで死んでしまおうとしたら、吾輩の人生はまったくもって無意味といわざるをえないなあ」

「莫須有先生、これからいろんなことをしゃべってくれていいんだけど、ただし理屈はこねないでもらいたくて、だってそういうのはだれもききたくないし、あんたにしても理屈をひとにきかせる必要はないわけだし、ひとが生きるっていうのは、一日を生きてゆくにあたって、ちょっとでも笑顔になるときがあればよいのであって、それさえあれば義務も権利もすべてやったといえるんじゃないかねえ。だからあんたがあたしにらにいっぱいしゃべってくれれば、あたしらはあんた

* 弘前大学大学院教育学研究科
** 弘前大学教育学部国語教育講座

1 悠然として南山を見る (悠然見南山) 陶淵明「飲酒其五」

のことを好きになるってもんなのさ」

「ひとついつておきたいのは、吾輩が腹をたてることがあっても責めないでほしいってことで、さっきあなたはなんていつてたっけ？ 吾輩に理屈をこねるなといったけど、あなたこそ吾輩にたいして理屈をこねているんじゃないかな？ あなたになにがわかっているというの？ 吾輩はなんだってしゃべるし、しゃべりたいこともいっぱいあるし、あなたたち女性のいうことをハイハイときくわけにもゆかないし、吾輩はやりたいようにやらせてもらうよ。吾輩があなたのところの間借りしているからといって、あなたに賄賂をおくって、吾輩を買収することはだれにもできやしないよ。それはよいとして、ちょっと水をいただきたくて、というのも講師がしゃべるときだってひたすらしゃべりつづけるだけというわけにもゆかないのであって、かならずノドをうるおすはずだから、つまりあなたは主人が客をもてなす礼儀をちっともまもっておらんのですよ」

「莫須有先生、あたしを責めないでほしいんだけど、あんたを目にしたとたんあたしはなにもかもすっかり忘れちまって、というのもあんたのことがカワイソウで、こんな若い身空で、孔子さまでもあるまいに徳は天地に配し道は古今に貫くといったふうに生きているなんて²、なんて節操のあるひとなんだろう！」

「あなたの最後の一句はいったいホメているのかケナしているのか、どうもよくわからないねえ——まあそれはよいとして、これまでの話はひとまず横において、ただ前口上をならべただけってということにしておくことにして、これから一所懸命におしゃべりいたしましょうかな。ふむ、ひとがこの世で生きてゆくというのは物語を書いたり、芝居を演じたりするのといっしょで、悲しいけれどもゆきすぎではない³、君主は臣下をいつくしみ臣下は君主をうやまい父は子をいつくしみ子は父をうやまう⁴、ありとあらゆる関係とはそういうふうであるべきなのであって、恋愛のときであれ、戦争のときであれ、カブトをすててヨロイをぬぐときはなりふりかまわないけれども、いずれ自分にふさわしくふるまえるようになるものなのさ」

「さあさあお茶でも飲んで、あんたの家主はあんたの

シアワセを祈っているよ」

「これはこれは、ありがとう」

莫須有先生はお茶をひと息に飲みほすと、ちょっと眉をくもらせたが、みっともない飲みかたをしたわけじゃないと自分にいいかせ、ふたつの袖をカッコよくひるがえし、かれの恋人がその豪快な飲みっぷりをビックリしつつもホメてくれるだろうとおもうことにした。

「さて吾輩はあなたにひとつの話をしてあげよう。むかし姉と妹とのふたりがいて、おなじひとりの男のことを好きになったんだけど、姉はかれの美貌にひかれていたのに、妹のほうはかれの才能にひかれていて、このひとはきっと科擧に首席で合格するにちがいないとおもっていた。姉はというと生まれつきうつくしく、そのしなやかな黒髪はトラをもつなぎとめるほどであり、妹はそんな姉のことをねたんでいた。ある日のこと三人は裏の庭園で宴会をひらいていたのだが、妹はふたりにしきりに酒をすすめ、ふたりはすっかり酔いがまわってしまった。そして最後の一杯となったとき、それはなにかといえ、なんと毒のはいった酒で、それを姉の杯にそそいで、姉はまさにそれを飲もうとする。そのときインテリのお坊ちゃんが、ひどく酔っぱらって興に乗ったか、酒杯をかかげて「この世にあるひとがいて、もしそのひとであるならば、そのひとでありさえすれば、そのひとが毒のはいった酒をたっぷりとついで飲ませようとしたら、ぼくは微塵もためらうことなく、ひと息にのみほすだろう」というと、まさに運命のそのひとである姉はその飲みさしの杯をささげ、すぐさま愛するひとの唇にそそいだところ、ふたりは忘我の境地におちいり、ふかぶかと接吻をかわすと、ともに最後の息をひきとったのだが、それと同時に天上の雷神夫妻がたちどころに稲妻をはしらせ、かわいそうに嫉妬ぶかい妹はおどろきのあまり石になってしまったんだ」

「石だなんて、金になればよかったのに」

「まあ、こればかりはしょうがないけど、そのひとの意識はそのひとの生活のありかたに左右されるからなあ！ あなたは金ばかりだね。まったく吾輩はさびしいよ」

「あらまあよい子ちゃんなこと、さびしさを感じられさえすれば御の字だわ。あんたのさっきのしゃべりっぷりがちょっと気になって、というのもなんだか事実をのべるっていうことを超えちゃいそうで心配だったのよ。人生には酔っぱらうということはあっちゃいけなくて、酔っぱらうってというのは人生を粗末にするっ

2 曲阜の孔子廟の石碑に「徳侔天地、道冠古今」とある由。

3 閑睡は楽しみて淫せず、哀しみて傷らず（閑睡楽而不淫、哀而不傷）『論語』八佾

4 君、君たり、臣、臣たり、父、父たり、子、子たり（君君、臣臣、父父、子子）『論語』顔淵

ていうことだから、だいたい藝術なんていうものも損失であることをまめかれっこないわけで、それはちょうどあんたのさっきの話があたしにはちっともおもしろくなかったみたいに、あんたのいまの気持はたぶんそういう話をしゃべるのにふさわしくないものなんだから、そういうのは茶店でぶらぶら油を売って遊んでばかりいるようなヒマ人だったらお似合いだったんだよ。あんたがなにを気にしているのかなんでどうでもいいんだけど、あえて一言だけいわせてもらえば、壮年のころは血の気がおおいから力づくのケンカ腰にならないように注意すべきだし⁵、大河を徒歩でわたろうとするような、そういう無謀な命知らずとはいっしょにやりたくないもんだわよね⁶。だいたいケンカ腰っていうのには広い意味があつてさ、べつにケンカっぽいやいっていただけじゃないんだよ。とにかくガマンしなさいってということなのよ」

莫須有先生はすっかりだまりこくってしまい、ぐったりと頭をふせて机をみつめているばかりなのは、おそらく痛みがおさまってからかつての痛みをおもいだして反芻しているといった感じなのだろう。ひとに訓戒をたれられるのにくらべれば、そんなに恥ずかしくはないとおもう。ふいに顔をあげると、あたかも拈華微笑といったふうに、ほほえみながらいうのであった。「むかしむかし文章を書いていたころの吾輩であつたら、あなたのような年配のひとのまえではすすり泣いてしまうところではあるけれども、いまの吾輩がそんなふうであつたらみっともないよね。さっきはほんとうに気になることがあつて、それが猛然とところに浮かんできたもんで、とりかえしのつかないことを口からでまかせにしゃべってしまったけれども、もうしゃべらないほうがよさそうだ。とにかく荷物を片づけさせてもらって、明日からはしっかりやんなきゃ。荷物といってもほんのすこしだけで、ほらご覧のとおり、この二冊は吾輩の大好きな本で、ひとつはイギリスのシェイクスピア、もうひとつはスペインのセルバンテス、どちらも世界的に有名な作家だよ。はなはだ興味

ぶかいことに、この傑作を、どうやらイギリスのシェイクスピアはじっさいに読んだらしいんだけど、いったい読み終わったときどうおもったのかしら？」

「どらどら、そのなかにはなににか絵でものっているのかい？」

莫須有先生は両手でささげもった『ドン・キホーテ』をわたしながら

「わかっているだろうけど、これはオモチャじゃないから、ちゃんと丁寧にあつかわれおくれ！」

「いわんこっちゃない——なんでそんなふうにケチくさいことをいっちゃうわけ？ そんな大騒ぎするほどのことかい？ あたしがまったくの世間知らずだでもおもってるの？ 娘さんが嫁入りするときの針仕事ならしこたま目にしてきたわよ」

「はああああ、店主が黄色に白斑のあるまだらの馬（黄驃馬）をつれて……」⁷

譚さんは秦瓊が馬を売のくだりをうたうときにか⁸。なんともはや悲しいじゃないか。そうこうするうちに気持の整理もついてきたか、金がふえれば家がうつくしくなり、徳をつめば身がたっとくとなるとおもいつつも⁹、ころにはさびしさがわだかまっております、あたりをみまわしてみても家主の奥さんしかみあたらず、腰をおろした拍子にいわずもがなのことを口走ってしまい——

「あなたはあなたの居場所にひっこんでいてくれないかなあ。ひとは歳をとればエラそうにしてもよいのではあるけれども、吾輩はけっきよくのところ若さというものを信奉しているんだよなあ」

いつのまにかタバコをふかしていた。

あわてて訂正しようとして——

「この期におよんではなにかも決まりがついてきたので、これから吾輩の話もどんどん日をおつておもしろおかしくなってゆき、われわれの間柄もいよいよ親しさをましてゆくだろうから、吾輩はこのなんのヘンテツもない世のなかにあつて奇跡ともいふべきことをやっつけてみせようとおもう。ひょっとすると世の

5 其の壮なるに及んでは、血氣方に剛ければ、之を戒むること闘に在り（及其壯也、血氣方剛、戒之在闘）『論語』季氏

6 暴虎馮河、死して悔い無き者は、吾れ与にせざるなり（暴虎馮河、死而無悔者、吾不与也）『論語』述而

7 京劇の『秦瓊売馬』に「店主東帶過了黃驃馬」云々というのは唐の名将である秦瓊の唱段がある由。

8 譚門は「京劇世家」として名高い。譚志道・譚培・譚小培・譚富英・譚元壽・譚孝曾・譚正岩の七代のうちもっとも有名なのは「同光十三絶」のひとり譚培（1847～1917）だが、ここでいう譚老板は、「四大鬚

生」のひとり譚富英（1906～1977）であろう。晩年、譚富英は病をわずらって京劇の舞台をはなれたが、見舞いにおとずれた後輩たちにベッドのうえで譚派の劇目『秦瓊売馬』をうたってきかせたという。「わしは天下にたれ知らぬものどてない英雄だが、金がないばかりに万事うまくゆかず、途方に暮れて店をでて、わしは、わしは、兵器（鋼）を質にとられ、馬も売ってしまい」云々。

9 富は屋を潤すも、徳は身を潤す（富潤屋、徳潤身）『大学』

なかをいきなり進化させてしまうことになるかもしれないけど、そうになったらあなたは吾輩の身内だから世間のひとびとからもてはやされることになるよ」

「なんの話をしてるんだい？ あんたってまさかとんでもない野心をいだいてるんじゃないかね？ あたしなんかアワの粥がありさえすればそれだけで足りるんだけどね」

「おもしろいことをいうねえ。いったい人生の意味っていうのはどこにあるんだろう？ それは友とのまじわりにある。さきものが木を植え、あとのものが陰で涼むというふうに、いっしょに愉快地やりながら、たがいに励ましあい、足をひっぱったりせず、若いも若きもなかよくやるっていうのがよいねえ」¹⁰

「あたしの部屋に遊びにいらっしやいな」

「どうも」

「どうぞ」

こうして莫須有先生は南むきの部屋につれてゆかれたのだが、すると今度は、どういう風の吹きまわしか、ちっとも口をききたくなくなってしまった。なんでだろう？ かれは語りかける。

「ああああ、おバアさん、吾輩はどうやら沈黙したくなってきたようだ」

おバアさんはそれをまったく無視し、ごそごそ片づけをしている。

「あなたのこの鏡台はもう何十年ものあいだ使いふりしたものにちがいない。莫須有先生はこの趣ある鏡台にいたく感動しておりますぞ」

かれの視線はおバアさんの化粧台のうえにまっすぐそそがれている。その鏡台のまわりはキレイに片づけられている。

「ひとつご高説をうけたまわりたいのだが、というのも吾輩はぐずぐずと悩むばかりになってしまいがちだからなんだけど、かりに吾輩が絶世の美女であって、しょっちゅう鏡をなくしたとっては快々として憂いにしずんでいるとして、その憂いっぷりときたら天下をうしなうよりもはなはだしいのは、なぜかということこの美女は世のしきたりをわきまえていないからなん

だよ。もともとは髪もぼさぼさのまま山で暮らすつもりだったのさ。まさか仏壇のガラスにうつった顔を見ておのれの美貌を知ってしまうことになるろうとはねえ。吾輩はきっと晩節をけがすことになるにちがいない。尼僧の身でありながら世俗にこがれるんだもの。めかしこむことに憂き身をやつしているっていうことは、この尼さんは根っから世俗のひとってことになる。どうしたって鳥や獣といっしょに暮らすわけにもゆかないんだし、けっきょく人間のほかに生きてゆくべき仲間をもたないんだものねえ¹¹。まずは恋愛からはじめるのがよろしかろう」

「なにデタラメをほざいてんの！ 明日からちゃんとマジメにやらないと、もうあんたのことを尊敬してやらないよ」

莫須有先生はバアさんの言葉には耳をかさず、ななめうえのほうに首をかしげ、壁にかかった写真をみつめている。そしてそのままだまりこくってしまう。その様子はというと、まるで壁にむかって十年間くらい修行しつづけたかのようにあって、こころ惹かれてはいるけれども我を忘れるというほどでもなかったのに¹²、ながめればながめるほどこころが惹きつけられてきて、じっさいどんな美人よりも溜息がでるほど魅力をおぼえさせられるとでもいった風情である。その写真の持ち主はというと、なんだか世界がいきなり静まりかえったような感じがして、いつのまにかつられて壁にかかった写真のほうをみやっていたのだが、バアさんがいったいなにをみているのか、莫須有先生はいっこうに気づいておらず——どうしてだれも一言もしゃべらないんだろう？ 莫須有先生はいつのまにか顔のむきを変えており、すると莫須有先生の家主の奥さんは照れくさそうにわらいながら——

「莫須有先生、あれはあたしが二十六のときに北京でとったものさ」

手にはクルミを盛った皿をもっていて、それを莫須有先生に味見させるつもりだったようだが、手にもった皿のことはすっかり忘れはてている。

「おバアさん、人生にはかならず敬という一文字がなければならぬんだねえ」

そういったきりすっかり言葉につまってしまう。だれかが外でドアをたたいているようだが、ドアには鍵はかかっておらず、ただ推しさえすればすぐにひらくようになっていて、莫須有先生はいったん身をのりだして外をのぞこうとしてすぐさま数歩あとしがりし、というも家主の奥さんがあわててドアのところの小走りでもかえにいったからで、ちょうど三人のバアさ

10 後の今を視るも亦由お今の昔を視るがごとくならん（後之視今亦由今之視昔）王羲之「蘭亭序」

11 夫子、愜然として曰く、鳥獸は与に群れを同じくす可からず。吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせんや（夫子愜然曰、鳥獸不可与同群。吾非斯人之徒与而誰与）『論語』微子

12 酒を嗜み能く嘯き、善く琴を弾けば、当に其の意を得て、忽ち形骸を忘るべし（嗜酒能嘯、善弹琴、当其得意、忽忘形骸）『晋書』阮籍伝

んたちがいっせいに片足ちょいとまげて挨拶しあっており、大きいネエさんこんにちは、こんにちは、三番目のおばさんこんにちは、こんにちは。莫須有先生はニコニコわらうふりをしつつもじつをいうとニコリともしていない。

「あんたのところに莫須有先生っていうひとがやってきたっていうんで、わざわざこうしてあいにくにきてあげたんだよ」

「じゃあ紹介してあげると、このひとが莫須有先生だよ。莫須有先生、こちらがうちのうしろに住んでる大きいネエさんで、こちらがうちの三番目のおばさんだよ」

莫須有先生はすごく口惜しくおもったのだが、なにが口惜しいかっていうのもっとはやく知りあいたかったからで、薄っぺらなおばさん、そう薄っぺらなおばさんだよ！ あんたってすごくケチなんだってね！

莫須有先生はおばさんたちがどこの国の Language をしゃべっているのやらまったく見当もつかず、とりわけ三番目のおばさんのしゃべっていることはさっぱりわからない。庭のなかで雁首そろえ、三人のバアさんたち、チラッとこっちのほうをみたかとおもうと、顔をくっつけ声をひそめ、せっかく寄りあったからには立ち話をしないわけにもゆくまいといった感じで、いかにもおのおの胸におもうところがあるというふうに、うれしそうに顔をほころばせ、それぞれ莫須有先生のことを話題にのぼしているらしく、ときおりチラチラとこっちに視線をおくりながら、さすがの偉大なる莫須有先生もこいつはひとつ防御策を講じねばなるまいとおもいはじめたのだが、家主の奥さんがやたらとうれしそうにしているところを見ると、どうやらお世辞をいわれているみたいである。三番目のおばさんもしゃべりまくっていたが、あるとき口をひらいた瞬間、莫須有先生はああこれはなにか莫須有先生にいおうとしているぞと気づいてしまい――

「莫須有先生、タマゴがほしけりゃ、うちから買ってくれよ」

「ふうん、やっとうかった、それをいいにきたんだね」

「あんたたち南のひとはみんなキレイずきで、おまけにタマゴにはうるさいからね。去年うちにも学生がひとりいたんだけど、いつもうちのタマゴを買っていたよ」

「あんたは吾輩のことを先生だとおもっているのか学生だとおもっているのかどっちなの？ あんたの目にはいったい莫須有先生はどんなふうにつつているん

だい？」

そこに家主の奥さんがいきなり割りこんできて、なんだか自慢げに――

「このおバアさんは頼みたいことがあって、というのも莫須有先生にこのひとのかわりに手紙をかいてほしいんだけど、このひとの息子さんは山東にいて、なんでも鉄道の仕事をしているみたいなんだよ」

そのおバアさんというのは、うしろに住んでる大きいネエさんのことで、すぐ目のまえまでつれてこられていて、莫須有先生はひどく困ったけれども、なんとかやりすごすしかすべはなさそうである。

「あなたたちの願いはよくわかったし、委細うけたまわり、ちゃんと肝に銘じたけれども、今日のところはおひきとりいただいて、手紙については明日かくというのでよろしいかな？ じゃあそうしましょう。さようなら」

そのまま莫須有先生はふりむくことなくさっさと部屋のなかにもどってゆくと寝床にはいり、その世界で起こっていることはキッパリと遮断してしまったのであるが、やがて目をさますと、寝ぼけまなこをこすりながら、家主の奥さんをよびつけ、こう申しつけた。

「これからタマゴを買うときには絶対にあの薄っぺらなおばさんから買っちゃいけないよ！ そしていつかあのひとの素性についてちゃんと教えておくれ」

「このご近所じゃあ、あのひとのことは三番目のおばさんってよぶんだけど、それでいいでしょ」

「三番目のおばさん？ ダメダメ、薄っぺらなおばさんってよびなさい！ これからはかならず薄っぺらなおばさんってよぶんだよ！」

第七章 莫須有先生はかいてやる

あれよあれよというまに数日がたち、莫須有先生はふとした拍子にあることを気にしはじめ、というのはもしだれかが吾輩のことを隠者とよぶものがあつたりしたら、かれはどういう口ぶりでそんなことをいうのかってということが気になってしょうがなく、というのなかれは吾輩がどれくらいの実力の持ち主であるかっていうことを知らないとおもうからである。そもそも田舎で暮らすほうが町に住んでいるよりも実力のほどがあからさまにバレてしまうものであって、田舎ではなにはさておき飢え死にするということが一大事であり、飢え死にしたものの死体はきっとカラスにつつかれて骨になるまでうっちゃっておかれるが、そこへゆくと町であれば、ちゃんと区の役人によって

死体を受けとりにくるようという紙切れを貼りだしてもらえから、旅人がゆきだおれになったとしても、ひとりぼっちでほったらかされるということはない。であるから世の詩人たちに伝えておきたいのだが、キミたちが詩をつくりたいのなら、キミたちはキミたちの住んでいる町にとどまっているべきであって、どんなことがあっても田舎にやってきちゃいけないのである。莫須有先生はキミたちのことを心配しているのである。何度でもくりかえしいつづけるし、死ぬまでいつづけても悔いることはないのだが、キミはそもそも『莫須有先生伝』の作者なんだから、なにがなんでも莫須有先生のいうことをきくべきであって、キミにとっていちばん大切なことはキミがいわゆる理想主義者になるということであり、そうすればキミは莫須有先生のことをよくわかり、莫須有先生もまたキミのことを愛してくれるだろう。いかなることにかんしてであれ独自の見識をもつというのはよろしくないことなのであって、それは人生にたいして申しわけないことであり、そのせいで莫須有先生の暮らしがひどく苦しいものになってしまうのである。文章をしたためるといふ場合であれば親しみあい愛しあって、たがいに盛りあがるべきである。しかしながらそれはもっぱら莫須有先生すなわち吾輩の性格のもたらすところのものである。莫須有先生、あなたはいったいなにをしゃべってるの？ まったくもってチンプンカンプンだから、とりあえずひとつ教えてほしいんだけど、このあいだの話がまだおわっていないわけで、けっきょくのところバアさんのかわりに手紙をかいてやったの？ ああそのことだったら、吾輩はかいてやったよ。昨日だったか吾輩はあのバアさんに今日とりにくるよういってんだけど、もちろん外交辞令にきまっているにもかかわらず、バアさんときたら今日とりにくるんだもの、これだから年寄りには参っちゃうよ。吾輩の知るかぎりでもあのバアさんは吾輩の家主の奥さんにしょっちゅういじわるをしていて、たとえばバアさんのうちにはナツメがいっぱいあるくせに、それを孫娘たちにはけっして食べさせてやろうとはせず、その四人のガキどもをひきつれて家主のうちにやってくるんだけど、うちの大家はなんでまたあんなに気前よくどっさりナツメをあげちゃうのかな？ どれくらい気前よくどっさりナツメをくれてやるかっていうと、ひとりひとりのガキにみつつつわたしてやって、それでもってそいつらが帰ってゆくとこの莫須有先生にむかってブツくさと文句をいうのはなんでなの？ 自分でもいっていたけど、お気の毒な

われらが家主の奥さんときたら、娘なんてひとりもいないにもかかわらず、よほどあのバアさんのご機嫌を損じるのがおそろしいのか、そもそも character からしてどうでもよいことを気に病まずにはおれないひとなのか？ それにしてもなんでまたひとの思惑にあんなにまで気をつかってしまうのかしらん？ 壁をへだてて隣にいる吾輩の耳にまでとびこんできたんだけど、ひとりひとりのガキにみつつつづつ来てやりながら、あなたはこういっていたよね

「これでよいのよ、だってうちのナツメなんて、子どもにあげるんでなきゃムダになるだけでしょ？」

「ほら二番目のおバアさんにありがとうっていいなさい。ほんとうにもうこの娘たちったら！ あたしがここにくるっていったらみんなゾロゾロくっついてきちゃったのよ！ さあさあ、とっとと帰るんだから、さわいじゃダメよ、壁のむこうでは莫須有先生が昼寝をしているんだから」

莫須有先生はこれをきいてゾッと身ぶるいしたのだが、というも日がな一日ぶらぶらと群れているばかりの能なしの田舎探偵よりもむしろこのバアさんのほうかはるかに用心すべきものだったわけで、なんてったって吾輩の昼寝の時間までもお見通しなんだからねえ。莫須有先生はこれまで仕事をするときはもちろん昼寝をするときであって、だれにも絶対に悟られないようにやってきたのであって、せいぜい軒先のツバメだけが莫須有先生がときおり溜息をふと漏らすのを知っているくらいであったのである。まるで仲間も財産もなくしてしまうかのようなもてなしをしておいて、おかげで吾輩の庭もスッカランになってしまいそうだっていうのに、あなたは吾輩にむかって苦しそうな顔をして小声でささやくのである――

「莫須有先生、さっきの老いぼれだけどさ、うちよりもよっぽどたくさんナツメをもっているんだけど、いつも孫娘たちをつれてうちにやってくるもんだから、どうしたって食べさせないわけにはゆかないでしょ？ まったくもう、こうやって義理をはたしつけて死んでしまうのさ。うちの亭主ときたらんで役たらずだからねえ。あたしはのべつひとの顔色をうかがって生きているしかないのよ」

「まったくもって沙汰のかぎりだし、バカバカしいったらありゃしない」

吾輩はつい苦笑いしてしまった。この地球上に生息しているのが吾輩とあなたとのふたりっきりというわけじゃないからには、あなたはなんでそんなに自分のことを苦しめたりしなきゃなんないわけ？ おまけに

吾輩まで巻きこんでどうしようっていうの？ そのとき吾輩はふいに吾輩のふるまいがひどく甘ったれたもののような気がしてきたもんで、しゃがんで石ころをさがしはじめる。もちろん吾輩はその石ころをひとつにぶつけるつもりはない。かといってそれで地べたに十字の落書きをするっていうのもおかしな話だけれども。さっきの古いぼれにかんしては、じつをいうと吾輩はとっくのむかしにあのバアさんにはきっちり釘を刺しておいたのであって、というのも初対面の日にあのバアさんはまったくなんの遠慮会釈もなく入口のすだれをめくりあげたかとおもうと足音もたてずに吾輩すなわち莫須有先生のきちんと片づけられた塵ひとつない書齋へとはいりこんできて、そのとき吾輩はちょうど詩をつくっており、それはもう一心不乱に詩をつくっており、あまりにも没頭していたのでつい大声でさげんでしまった。

「なにをしている！」

吾輩にはわかっていたんだが、やっぱりやってきやがったというところをみると、やっこさんは吾輩に手紙をかいてほしいわけで、そのくせ手ぶらでやってきたにちがいない。

「ははは。ここにはおまえさんの居場所なんてないし、おまえさんが年寄りだからといってビビるとおもったら大間違い、そもそも詩壇には遠慮という二文字はないのであって、おまえさんは勝手にやってきたくてやってきたんだから勝手にそこにいればよいわけで、吾輩がこれから脚韻について推敲するあいだそこでおとなしく待っておればよいのだ」

「あたしはただ莫須有先生にあたしのかわりに手紙をかいてほしいだけなのさ」

「おまえさんにかわって手紙をかくのかい？ それをすることにこれっぽっちの価値もみいだせないとしても、まあかいてやらんというわけでもないが、まあなんといおうか、いやじつをいうと吾輩はいまふいに生計をたてるすべをおもいついてしまったんだが、吾輩はひょっとすると天橋のうえに露店をだして、大道易者よろしく、百代先であっても知ることができるとうそぶいたりできるかもしれんのだが¹、それってこのバアさんのために手紙をかいてやるようなものだったりして。いまここで報酬のことをいうのもなんだけれども——さっさともっといいで」

もちろん吾輩はこんなバアさんのことなんてどうで

もよいとおもっており、したがって吾輩の仕事のジャマをさせるつもりはこれっぽっちもなく、ただ手をまっすぐ横にのばして「さっさともっといいで」というふうにもさも熟練の職人ででもあるかのようにいってやっただけなのであった。莫須有先生、あなたのその横にのばした手はいつまでたってもカラッポのままだろうから、さっさとひっこめたほうがよいとおもうよ。そんなことは吾輩だってわかっている。すばらしく素敵な詩が、ようやく仕上がったので、吾輩はおもむろにバアさんのほうにむきなおって相手をしてやることにした。ほらバアさんをみてご覧よ、いやらしくニヤニヤとわらっている顔つきときたら、いかにも海千山千といったズルがしこさをあらわしており、吾輩ごときの目論見なんかとっくのむかしにお見通しにちがいないのであって——

「莫須有先生、便箋を一枚めぐんでほしいんだけど、というのもここは田舎なもんで、なんにも手にはいらなくて、町にいってなにか買おうとおもったところで、お金をはらうといわないかぎり、だれひとりとして見向きもしてくれないだよ」

「お金をはらうといわないかぎりって——」

おやおやお覧よ、ここぞというタイミングをみはからってバアさんのほうにむきなおったっていうのに、吾輩の家主の奥さんがいつのまに気配をかぎつけたのか部屋のなかにまぎれこんでいるじゃないか！ まぎれこんできたかとおもったら奥さんはあたかも吾輩の秘書でもあるかのような顔をして、吾輩のかたわらにやってきたまま一言もしゃべろうともせず、とはいえ腹のなかには話したいことが山盛りだっということ吾輩にはわかっており、やがて低い声でしゃべりはじめ——

「ネエさん、ごはん食べた？ 莫須有先生のお仕事がおわるまでおとなしく待っていてほしいんだけど、あたしが昨日ちゃんとお願いしておいたから、今日はきっと手紙をかいてくれるだろうからさ」

どうしてそんなにご機嫌をとろうとするんだ！ けっきょく気になっているのは吾輩の都合なのかそれとも自分の都合なのかいったいどっちなの？ ふん！

どうやら吾輩はみずからすすんで便箋をさしあげたほうがよいってということみたいだね！ おまけに部屋のなかがネギの臭いでぶんぶんしてきたもんだから、吾輩はどうしようもなく憎たらしくなってきて——

「家主の奥さん、ごはんを食べてきたでしょ！」

「ええ、ついでしたが食べたばかりだけど」

「吾輩はつくづく不思議でならないんだけどあなたた

1 百世と雖も知る可きなり（雖百世可知也）『論語』為政

ち北京の女のひとはどうしてみんなネギを食べるのがそんなに好きなんだ！」

吾輩はしゃべってすぐに理不尽なことをいっちゃったと気づいたが、口がすべってしまったからには時すでにおそく、ところがチラッとみていると、「姉妹たち」はとっくに顔をよせてたがいの耳もとでひそひそ話をかわしあっており、莫須有先生のしゃべったことなんかどこ吹く風といったふうであった。

「あたしとしては莫須有先生に便箋を一枚めぐんでほしいわけよ。そのかわり莫須有先生の洗いものとか、あるいは縫いものとかがあったら、この二番目の妹のところにもってゆけば妹はあたしのところにもってくることもできるわけで、あたしたち姉妹にはちっとも遠慮しなくてかまわなくて、だってあたしたち姉妹にはいくらでもヒマがありあまっているし、あたしたちとちがってあんたはひとり暮らしなんだからさ」

「いまどき庭園のほうで洗いものをしている女たちに上着とズボンとのおそろえを洗濯させると銅貨十枚はふんだくられるってこと知ってる？ 昨日だけか莫須有先生はあたしにもってゆかせようとしたんだけどさ——ちょうどいまは夏休みだもんで庭園はいちやついているカップルでごったがえしているにちがいないのがイヤだったし、それにあそこのバアさんたちときたら、なにせ町のほうのはたらきぶり染まりきっているから、男ものだろうが女ものだろうがごちゃまぜにしても平気で、いっしょくたに洗っちゃまうんだよ！

絶対にちゃんと洗えっこないさ」

「ウワサじゃ上下ひとそろえで銅貨二十枚らしいよ」

姉妹はふたりそろってしきりに思案顔をしてみせるが、莫須有先生はというと頭をゆらゆらさせながら耳をそばだてて安楽椅子にすわっていたかとおもうといきなりウズウズしてきたのか三回たてつづけに大声でハハハとわらう。

「ハハハ。ハハハ。ハハハ」

「莫須有先生、ふざけないでおくれ、ビックリするじゃないの」

「ハハハ、家主の奥さん、あなたというひとはなんともはや忠義心にあふれたひとであるようだが、吾輩がおもうにあなたは調子じゃいつまでたってもネエさんのナツメを食べられそうにもないし、とにかく吾輩のことはあまり心配してくれなくてもよいから、なにからなにまで吾輩のことは吾輩にまかせてくれればよいのであって、商売でやるなら商売でやり、人情でゆくなら人情でゆくというふうには、吾輩だったらうまいこと臨機応変にやるからさ。さてそうとなったら、

ええっとおバアさん、おまえさんは吾輩に手紙をかかせようとしてやってきて、おまけに便箋までめぐんでほしいといっているわけで、いますぐテキパキとやっつけてしまうけどさ、ただこれだけは肝に銘じてほしいのだが、ほらこれをよくご覧なさい、むかしむかし高祖皇帝の直筆にかかる梅の花があしらわれた便箋であって、恐れおおくも宮中の奥ふかくのやんごとなきお方のところから莫須有先生みずから秘策を講じてやっとのことで盗みだしてきたものなんだけど、これは一日あわざれば三年はなるがごとしといった想いを切々としたためるべき逸品なのであって、こころに恋するひとのことを一途に浮かべつつ、おのが思慕の念をつづるべきところのものであるにもかかわらず、おお、なんともはや悲しいことではないか、それがなんと吾輩の目のまえで顔色をうかがいながらたがいに腹をさぐりあっているあなたたちにうながされて手紙をかかためなんかにつかわれるところまで落ちぶれるとは！ 莫須有先生がおれの小遣いでもとめたものは、数こそすくないけれども、どれひとつとして下品なものはないのであって、とはいえおまえさんはこうしてもうやってきてしまったわけで、それにどうやらなにをいっても聞く耳をもっていそうにないし、しょうがないから手紙をかいてあげよう。ははは、いやはやひと息に何百字もしゃべってしまうとは、これを商務印書館にもってゆけばきつとそこその値段になるはずだが、だからといって吾輩はべつに損をしたというわけでもあるまい」

「大きいネエさん、ほらこの便箋はなんて素敵なんだろう。この模様のきれいなことといたら、うちの田舎じゃ絶対にお目にかかれぬものじゃない？」

「あたしには美的センスがないからよくわからないよ」

「おまえさんに美的センスがないことなんて先刻承知だよ！ おまえさんにとってはうつくしいかどうかなんてことはどうでもよいんだよ！ ——ところで吾輩の家主の奥さん、芝居をみたことはありますか？ 芝居のときに舞台のうえで手紙をしたためるときはおそろしく素早くかくんだけど、ほらもうかいちゃったよ。吾輩の手際のほども捨てたもんじゃない。なんちゃってね。ご命令どおりにちゃっちゃと片づけましたよ！」

第八章 さっきの出来事のつづき

さきほどからの出来事はどうなったのかについて後

刻たずねたところ簡単におわるような話ではなかったようで、莫須有先生はみずからすすんで封筒までさしあげるといふハメになったうえに、それだけにとどまらずバアさんのかわりにせつかくの弁舌御用達の舌で切手をなめてくっつけてやったりもしたのである。さらにそれだけにとどまらず、中華民国の切手を取りだしてきたり、はたまた大英帝国のアルファベットをかいたものをもってきたり、あるいは張作霖大元帥の写真のついたものをひっぱりだしてきたかとおもうと、ちゃんと代金の四分にあたるものをひきちぎってやったりしてやる。

「おバアさん、吾輩はべつにおまえさんにかわって手間をはぶいてやりたいとおもっているわけじゃなくて、なんだか今日はどういうわけか吾輩はこういうはじめてのことをやってみたくなただけであって、ここにはりつけたのは田舎にやってくるまえにわざわざ買いもどめてきた記念切手なのだが、おまえさんはだたこの封筒をP.O. という文字がかいてあるポストのなかにポイとほうりこみさえすればよいだけで——しっかり目ん玉をおっぴろげているかい？ もうこうして切手もちゃんとあつて準備万端ととのっているから、ほらほらご覧、張作霖大元帥だよ、このあいだ日本人によって爆弾で殺されてしまったひとだ」

「すっかり莫須有先生のお世話になっちゃったね——あたしらはご近所どうしなんだから、これからも莫須有先生にはなにくれとなく面倒をかけるかもしれないわ」

「わかったから、もう帰っておくれ。家主の奥さん、あなたも帰ってよらしい。吾輩はまったく頭がこんがらかってしまったんだが、いったい吾輩の世界というのは、はたして詩人のすまう世界なのか、はたまた俗人のうごめく世界なのか！ 維摩詰のところに、ひとりの天女があらわれ、ひよっとするとキツネの化けたやつかもしれないが、とにかく忽然として身をあらわしてこられれば、吾輩だってそれを幻だとはおもわない。まったくこのバアさんときたら、おまえさんがふつうの寿命で死んでいてくれたら墓に植えた木はもうひとかかえほどの太さになっていただろうに¹、いやはや年寄りやしつこいというけれども²、まったく吾輩にはおよそ信じられんよ」

バアさんはようやく帰りかけようとしたが、まだまだ油断はならんというふうにかすんだ目をこらして封筒をみつめる。

「莫須有先生、これってあたしのかわりにかいてくれた手紙じゃないのかい？」

「おまえさんの手紙じゃないとしたらなんだっていうの？」

「だったらなんでここに巻きタバコの絵なんかはりつけてるの？ いくら若いからといってもうちょっとしっかりやっておくれよ！ あたしや古希をすぎちまったバアさんで、ただ手紙をかいてほしかったっていうだけど、イヤならことわりやいいのに、なんで年寄りをからかうんだい？ あたしの手紙にこんな絵をはりつけるなんて！ せがれに小遣いをおくってもらいたくて、こうやって半日もたちんぼうまでして、あんたに手紙をかいてもらおうとしたっていうのにさ！」

「おまえさんはなにをいってるんだい！ これが四文の切手じゃないとでもいうのかい？ さっきからさんざん教えてやってきたっていうのに、おまえさんの耳にはなんにもきこえていなかったの？ やれやれ、どうやら運がわるかったとおもうよりなさそうだな。つべこべいわずにポストにほうりこんできて、もしおまえさんの息子が金をおくってこなかったら、そのときはまた吾輩のところに戻っておいで」

「莫須有先生、あんたのいうことはなんだかおかしいよ。あんたはこの手紙がちゃんとせがれにとどくっていったよね。だけどせがれから金がちゃんととどくかどうかっていうことはわからないんじゃないの？」

「なるほどおまえさんのいうことはもっともだ。ああもうだれか吾輩にかわってバアさんにいってやってくれないかなあ、まさかあなたたちはこれまで手紙をだしたことがないとでもいうのかい？ それともこれまで切手もはらずにだしてきちゃったのかい？ この四文の切手もはったことがないっていうの？ いったい吾輩のなにが気に食わないっていうんだい？」

「あたしはこの世に生まれてきてこれまでひとに手紙をだしたことなくこれっぽっちもないんだよ」

「それはそれはお気の毒に——これまで生きてきて昨日までのところ、吾輩だってラブレターなるものをついぞしたためたことはないなあ——おバアさん、わるいことはいわないからもう帰ったほうがよいとおもうんだけど、っていうのもこれで四かける四で十六枚の銅貨をはらわずにすむんだからさ」

1 爾、何をか知らん。中寿ならば爾が墓の木は拱とならん（爾何知。中寿爾墓之木拱矣）『左伝』僖公三十二年 ムダに長生きしおってという罵りの言葉。
2 彼、其の髪は短けれども、心は甚だ長し（彼其髪短、而心甚長）『左伝』昭公三年 髪は短くても心は長いとは、ひどく執念ぶかいこと。

「ネエさん、なんてたって莫須有先生はあたしたちなんかよりうんと見識があるんだから、このさいいわれたとおりにしたらどうかしら」

「だったらあたしはお金をはらわなくてもいいの？」

「はらうにきまってるだろ！ 十六枚だ！ いますぐ吾輩によこしなさい！ ——吾輩はこれから海淀区の郵便局にたのみこんで、この自治をしている村のすべての家をまかなえるように、どこかにひとつ郵便ポストをしつらえさえておきすれば、たとえば吾輩の家のまえにとりつけておけば、毎日だれかひとりが自転車をこいでそれを回収しにきてくれるという段取にしておきさえすればよいわけで、夜暗くなったら灯りをともしておくなどすれば、そうすればもうはるばる山を越えたり、わざわざ大通りをあるいたりして、スッテソコロリンと転ばずにすむよ！」

「夜暗くなったら灯りをともすって——それだったらあたしたちにとっちゃ家もとのありさまにもどるってだけのことで、むかしはあたしんちの門のところにも晴れようが雨がふろうがいつだって灯りがともしてあったもんさ」

「このご時世ではなにかにつけて南の学生のほうが有利だよ。家主さん、どうも迷惑をかけちゃったかな」

「そんなことないよ——ネエさんはもう帰るの？」

「帰るけど」

「おやまあ、あたしをほっぽらかして帰っちゃうなんて、なんだかあたしが迷惑をかけたみたいじゃないか！ ははは」

おおきくアクビをする。そして安楽椅子にすわり目をつむってひと休み。家主の奥さんとはいうと、客をおくりだしてからもどってくると、もうちょっと話をしたくてたまらないらしく、すだれをめくって部屋にはいつか来たのだが、ぐったりと横たわったまま相手にしてくれそうもないのを見るや、首をすくめてすごすごとひきかえそうとしたところ、莫須有先生はひとつ咳ばらいをしてひきとめた。じつをいうとかれはたいへん小心者なのであって、いつも悠々としているようにみせかけているのは無理をして虚勢をはっているのである。

「あら寝ていたんじゃないの？ 起こしちゃうん

じゃないかとおもってヒヤヒヤしたわ」

「こうやって吾輩がゆらゆらと頭をゆらしているのをみれば、なんにも答えたくないんだっていうことはわかりそうなもんだが、世間のしがらみにつきあわされて吾輩はくたびれちゃったのだよ」

「うまいこというじゃないの！ ゆらゆらと頭をゆらすのはだまっていたっていいことなんだね」

というわけで莫須有先生はだまりこくる。目があるからといってかならずしも目をあけねばならんというわけではない。腹をたてているといってもよい。落ちついていっているといってもよい。目がみえないといってもよい。とにかく莫須有先生はあなたのことをまったくみようともしないのである。バアさんはとうとう辛抱しきれずにしゃべりだす——

「さっきのバアさんだけど、あたしたちの着るものは絶対にあのひとに洗わせたりしちゃいけないのであって——さっき莫須有先生ったらあたしたち三人でいたときにあのひとに面とむかって返事をしちゃうんじゃないかとおもってヒヤヒヤしていたんだけど、きっとあのひとはあとで文句をいってくるにちがいでなくて、あたしが独り占めしようとしているとか、あたしが莫須有先生のことをなんでも決めようとしているとかね。あたしはおもうんだけど、目のまえにいるひとにたいしてはさ、どうしても遠慮しちゃって、もしあのひとが高い値段をふっかけてこようと、あたしはどうやって値切ったらいいんだい？」

突如として一大事に気づいてしまったんだけど、というのは自分ばかりがしゃべりつけているもんだから、莫須有先生はひよっとすると眠りこけているんじゃないかっていうことで、しかしまあ腹をたててもしょうがないしねえ。

「おふたりさん、吾輩はノドがかわいたから水を一杯もってきておくれ……家主の奥さん、いよいよ秋がやってきて、風もすずしくなってきたのに、吾輩のあわせの着ものはまだ質に置いたままであって……吾輩の母さんは吾輩のことを恋しがっており……父さんさんどうか吾輩のことを責めないでください……悟ったひとはねむっても夢をみない³……ひらひらと舞いおどるチョウチョであって……⁴」

「おやまあ、莫須有先生ったらきっと夢でもみちゃってるんだよ！ どうしらいいんだろう？ どうしようもないわよねえ。莫須有先生……あたしゃひとまず退散するからね……」

3 古の真人は、其の寝ぬるや夢みず、其の覚むるや憂い無し（古之真人、其寝不夢、其覚無憂）『莊子』大宗師

4 昔者、莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり（昔者、莊周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也）『莊子』齊物論

第九章 白ちゃんが歌をうたう

「今日は暑いあるね」

「あなたは無理して北京訛りでしゃべらないほうがいいわよ、っていうのもなんだかしっくりきていなくて、ひどく耳ざわりなんだもの」

「ははは、ということは吾輩のしゃべる北京語もうまくなってきたってことで、そんなふうにいってもらえるっていうのはむしろ愉快なくらいなんだけど、かといってあなたたちと競争しようなんていう気はこれっぽっちもないんだよ。むかし学校でギリシア語やラテン語を勉強していたときはそうでもなかったけどね。吾輩はいつだって自分の pronunciation は絶対に正しいとおもっていて、みんなの発音はなんであんなにヘタクソなんだろう、きっと舌がうまくまわらないだろうなあと鼻でわらっていたんだけど、とある同級生があるとき吾輩にむかってきわめて真摯な顔つきでしゃべりかけてきたことがあって、かれは吾輩につねづね敬服していることわったうえで、たしかに吾輩の本を読み解く能力はすぐれているけれども、ただ惜しいことに本を音読することはいまひとつパツとしないといってきたもんだから、吾輩はひどく腹がたってきてまるでカエルみたいに、そう腹がふくらんじゃって——吾輩の発音のなにがまずいっていうんだ？ いまにしておもえば申し訳ないとおもうんだけど、いつだったか電話をかけたときにピンときたのは、吾輩の発音はじっさいヘタクソなのであって、たとえば四、十、二、しゃべればしゃべるほどヘンテコになってしまい、けっきょく電話の交換手もまちがってしまうんだよね」

今日はなにしろ暑いもんだから、家主とふたりいっしょに木陰にすわって涼んでいる。莫須有先生はたったいまベッドから起きてきたばかりで、というのもちよほど昼寝から目をさましたばかりで、家主の奥さんがヒザをかかえてすわっているのをみつけると、いっしょに腰をおろすのによさそうな石をはこんできて奥さんのそばに寄っていつてすわったのである。

「ふわあああ——ほらほら吾輩はまだ寝ボケている。ひとは一日に一回でもアクビをしさえすれば、けっこうそれで楽ちんになるもんだね」

「ふわあああ——ほらほらあたままで眠たくなっちゃったじゃないのさ」

「あなたのアクビはすごくみっともなく、まるで死にぞこないの——いかんいかん、いらんことをいっちゃいかんな」

「ひとつ忠告させてもらうけど、あんまり調子にのらないほうがいいよ——どうやらあなたの生活もじっさいのところ愉快なことばかりじゃないみたいだし、っていうのも好むと好まざるとにかかわらず道化役を演じざるをえないと自分ではおもっているようだけど、ひとはみんなあなたのことを仙人のようにみなすばかりで、だれもあなたのことをホントに心配するものなんていやしくて、そりゃあだれも仙人のことを嫉妬したりなんてするわけもないんだけどさ」

「じゃあだれか吾輩のことを嫉妬するひとはいるのかな？ だれよりもあなたが吾輩のことを嫉妬しているんじゃないの？ ふん！ ——ほんとうに愉快かどうかといえば愉快にはちがいないんだけど、それはなによりも吾輩くらいたっぷりヒマがあるものほどどこにもいないっていうことであって、このことは吾輩みずからの努力のたまものにはほかならず、およそ是非や得失にかんして、吾輩はきわめてハッキリとわきまえているのだから、この世のいったいどこに吾輩にたいして四の五のいえるものなんていたりするだろうか？」

「だからあたしがいつているのはまさにそういうことなのであって、あんたはどうしてもそんなふうにいっちゃうんだから！ ほらご覧なさいよ、みんなあなたのことなんかすっかり忘れちゃって、ここに引越してきてからというもの、あんたのところに一通でも手紙がとどいたかい？」

「まったくもってお説ごもつとも——あなたは莫須有先生がまだまだ未熟だっていうことをちゃんとわかっているんだねえ！ もし人間がおたがいのことをすっかり忘れることができるならば、おそらく生きている時間はずいぶん長いものになるんじゃないかとおもうけど、吾輩はまだその境地にはほど遠くて、だれかひとりのことをなつかしくおもったりすることが相変わらずやっぱりよるこびとしてころのなかに余韻をただよわせていたりして、こういうのってあなたたちみたいな田舎のバアさんたちの人情のしがらみが大好きなのとなんにもちがっていないわけで、どこからみてもこれはもうまったく自分を表現することからはなれられていないっていうことだよ。むかし「金髪の小娘」にガツンとやられたことをおぼえているんだけど、その小娘がいうには、「あなたにはひとを愛するっていうことがあるの？ けっきょくあなたって自分を表現したいだけなんじゃないの！」と、こんなふうにはっきりいわれちゃった日にはどうにも言い訳のしようもなく、吾輩はもうビクビク仰天してしまっただけで、その髪の毛はっていうと、金色

にかがやき、夕陽にうつくしく照らされて、桃源郷にたたずんで花びらが散るのをみていながら、その花びらがいつまでも夕陽に照らされつづけてほしいとおもうようであって、吾輩はつい金髪の小娘とよびかけてしまったんだけどその娘はむしろ誇らしげであって、ちっとも気をわるくしなかったっけ」

「その娘はまるで外国人みたいだったんだね」

「まあ、ちかごろ吾輩はすっかり抽象的になってしまって、なんでもかんでも冗談めかしてしまいがちで、自分のことをネタにしてふざけてみたり、落っこしたり振りまわしたり、この手でこうやって——なんだっけ、そういえば昨晚たしかに吾輩はなにかの夢をみたんだけど、なんだったのかっていうと……目がさめてからああ夢だったんだと気がついて、なんだか悲しくなっちゃったよ。それはもう寒いくらいさびしくて、まるで異境にほうりだされたみたいで、てっきり月にいるんだとばかりおもったっけ。あなたにいつかおきたいんだけど、こんなふうに吾輩はとってもお気の毒な身のうえなのであって、夢のなかに吾輩の現実があらわれてくるのかとおもえば、吾輩の現実がましく夢にほかならなかつたりする。吾輩の母親がこれを知ったら吾輩のかわりに嫁をみつけるというだろうし——なにとぞ吾輩のこういう子どもっぽい心情をおゆるしいだきたい」

「わかってるよ、あんたはなんにも……」

「わかってるって、なにがわかっているというんだ！

吾輩があなたに家賃をはらうときにはなんにもしゃべらなくてよいということを知っているのか！ さっさともらっておけばよいのであって、そうすれば吾輩がいらんことをいう手間がはぶけるんだから、すこしは気をつけてほしいよ！ もちろん厚意からなのだっていうことは吾輩だってわかっているけれども、いまのご時世はひどく不景気なことでもあるし、それになんていうか、このお金だけ¹、せつかく吾輩がさしだしたからには、あなたは受けとるべきなの

であって、そこでやりとりされるお金はっていうと、あなたのものなのか、吾輩のものなのか、だれだって手放したくはないわけで……わかっているって、なにがわかっているというんだ！ こうなったらむしろ吾輩が、むしろ吾輩のほうが泣いちゃったほうの方がマシであって、うえ～ん、うえ～ん、うえ～ん……」

「まったく涙たれ小僧みたいになんてうえ～んうえ～んうえ～んってウソ泣きしてどうしようっていうんだい？」

「もし吾輩がああ林なにかしとかいうお嬢さんだったら²、しょっちゅう目を赤く泣きはらしてばかりいることになるにちがいないが、とにかくこれから吾輩のおしゃべりをきいてもらおうとして、家にあつては親孝行、国にあつては——いまだつたら大衆の指導者になるとでもいうべきところで、あなたのいるような田舎にやってきて仙人をやっている場合じゃない。なんてこった、またもや見栄をはるようなことを口走ってしまったけど、莫須有先生のいうことはもともと非常につつしみぶかいものであるはずなのに、あなたの教えをうかがうことができ、いまさらながらお導きいただいているという感じがしきりにするのであって、とりわけ文章をものするさいにはとにかく得意になりがちだから、ここをおだやかにするというところについての工夫をおこたらないようにしなければならない」

「なにをいってるんだかさっぱりピンとこないけど——なにか心配なことでもあるのかい？」

「ではいわせていただくとして、どうせ神さまはお見通しだろうし、アーメン！ いまにかぎったことではないが、吾輩つらつらおもんみるに、こういう絶好のタイミングでうまいこと涙をこぼすことができれば、きっと孤児や後家だったらコロリとひっかけられるだろうとおもうんだ。いまとなつては吾輩はかならずしも出家しなくてもよさそうだね。しかしながら、吾輩がちゃんと修行のやりかたをわきまえているというわけでもない。とはいえ、あえていわせてもらえば、そもそも若くして出家した坊主なんていうやからは、たいていデタラメであつて、ものごとを粗末にするものだよ」

「あんたのいうことときたら子どもっぽくてなにがなんだかさっぱりわけがわかんないね」

「吾輩はなにひとつ恐れるものはないのであって、この世間にあつて吾輩がやることはそれを自然にやるのでなければやるはずがないことなのだから、やってしまったからには吾輩がなにはともあれ罪を問われるなんていうことはありえないだよ」

「なんともはや大胆なこと！」

1 この箇所の原文は「交通銀行」だが、紙幣・現金と解して訳しておく。「1929年の世界大恐慌を経て、1934年に米国が銀の備蓄を開始すると、銀の国際価格が大幅に上昇した。銀本位制を採用していた国民政府は、銀の国外流出を阻止すべく、1935年に幣制改革を断行し、銀本位制の停止と管理通貨制度への移行を定めた。これにより、それまでの雑多な通貨は、政府系の4銀行（中央・中国・交通・中国農民銀行）の発行する法定紙幣（法幣）に統一された」（『中国文化事典』丸善出版 633頁）

2 「林姑娘」とは『紅樓夢』のヒロインのひとり林黛玉であろう。

「吾輩はむしろ用心しすぎているんじゃないかと悩むくらいであって、しょっちゅう自分にたいして不満をいっているもんだから、ついつい自分で自分をあざわらってしまいがちなんだけど、いったい人間ってどうしてこんなに退屈なんだろう？ そもそも人生っていうやつは失敗の積みかさねなんじゃないの？ とはいえ吾輩はいつもところがけているのだが、おたがいの生活をそこなわないように気をつけあわなきゃならなくて、だから吾輩はいろんなことを知ってはいるんだけど、つつがなく生きてゆくためにも命をあやうくするようなことについては軽々しくしゃべらないようにしている。ひとが禽獣とちがっているところはほんのちょっとにすぎないんだけど³、ただしそのちがいはとてもでっかくて、おのれの欲にうちかってひとに優しくするというのが相手の身になって考えるという生きかたなのであって、まさにそういう相手の身になって考えるというのがひとの生きかたなのだ⁴。あらゆるものごとはけっきょくこの「ひと」という文字にゆきつく。ひとという文字には当然のこととして自分という意味がふくまれている。いわゆる文明というものはここにもとづいている。このことがちゃんと腑に落ちたなら、ほとんどのものごとを洞察できてしまう⁵。吾輩は生まれてこのかた疲れっぱなしで——ああやって浮かんでいる白い雲は千年ものあいだああやって浮かんでいるわけで、その飄飄然たるありようは吾輩とはくらべものにならん！ あなたはなんにも感じないの？ いったいどういうひとなの？ 吾輩はまさか影と駆けっこしなきゃなんないの⁶？ 形影問答でもしろって言うの？ ははは、今日はまったく一人芝居を演じてしまったよ。すこしだけ眠ることができたから気分がよるしい。ことわざにもあるとおり、黄連木のしたで琴をひいていると、その苦しさもまた楽しめてやつだ」

「ちょっときいて！」

「きくって吾輩の行進曲をかい？」

「ちがうってば！ ほらきいてごらん、なんだかそこのほうでガヤガヤしていない？」

「じゃあちょっとみてこよう——ちょうど吾輩はここから逃げだしたかったところだし」

さっさと逃げだされてしまったもんだから、ほっぴりだされた家主の奥さんはひとりで思案にふけるのであったが、おそらく莫須有先生の人生にはひとにいえなようなことがいっぱいあるにちがいがなく、これからもいろんなひとがあたしにたずねてくることになるんだらうけど——あたしにはなんにもわかっていないじゃないのさ！ そもそもあのひとのお金はいったいどこからでてくるんだい？ お金がどこからでてくるのかってことがあのひとにどんな影響をあたえているんだらう？ あのひとは根っから大ボラ吹きなのかしら？ ふところが不如意であるときはあたしみたいにグチをこぼすのかね？ さっぱりわからないったら、さっぱりわからないわ。なにがなんだかわからないよ。

ところで莫須有先生はというとそんなに遠くまではいってなくて、というも奥さんはきっと陰でひとしきり臆測をたくましゅうするのだらうということがわかっていたからで、とてつもなく高い孔子さま家の塀にこっそり耳をくつつけるようにして盗聴におよんだのであったが⁷、そうこうするうちに由々しき一大事がおこり、あいた口がふさがらなくなったわけで、あろうことか吾輩が根っからの大ボラ吹きだって？ 霞を食っているともいうのか？ 露を飲んでいるともいうのか？ なんてまた今年はこんなに運勢がわるいんだ？……

「莫須有先生、そこでなにしてるの？ チョウチョでもつかまえてるのかい？」

「おまえさんは——おまえさんはいったいだれだっけ？ 薄っぺらなおばさんじゃないか！ 吾輩がここでチョウチョでもつかまえているのかって？ おまえさんは『紅樓夢』をよんだことがあるかい？ 薛なながしとかいうお嬢さんのことは知ってるかな⁸？ そうそう、このチョウチョはなかなかキレイだけど、吾輩の郷里ではこれを梁山伯とよんでいて⁹、ほらご覧よ、飛んでいるじゃないか。おまえさんはどこにゆくのか？」

「あたしは畑にいて、イナゴをおっぱらおうとおもっていて、だってあいつらはうちのサツマイモの苗を片っぱしから食っちゃうんだもの」

3 孟子曰く、人の禽獣と異なる所以の者は幾ど希なし（孟子曰、人之所以異於禽獣者幾希）『孟子』離婁下

4 己に克ちて礼に復るを仁と為す（克己復礼為仁）『論語』顔淵

5 知者、其の象辭を觀れば、則ち思い半ばに過ぎん（知者觀其象辭、則思過半矣）『易經』繫辭下伝

6 陶淵明の「形影神」が念頭にあるのかもしれない。

7 夫子の牆や数仞なり。其の門を得て入らざれば、宗廟の美・百官の富を見ず。其の門を得る者、或いは寡なし（夫子之牆數仞。不得其門而入、不見宗廟之美百官之富。得其門者或寡矣）『論語』子張

8 「薛姑娘」とは『紅樓夢』のヒロインのひとり薛宝釵であろう。

「今年はずいぶんイナゴがいるみたいではあるが、吾輩のおもうところによれば、イナゴはけっしてサツマイモを食ったりはせんのであって、おまえさんは吾輩にたいして皮肉をいっているみたいだけど、なんでもこないだの月の明るい晩におまえさんの畑の隅っこのところでサツマイモがひとつ盗まれたそうじゃないか。おまえさんはちょうどよいところにやってきたわけで、というも吾輩はちょうどいままさに首を吊ろうとおもっていたところであって、こうやって木をながめていたら楊貴妃が菩提樹の枝に首を吊って死んだってということをおもいだしたよ」

「なんでまたそんな？」

「吾輩はまさに木の切株をみはってウサギをまちぼうけしているのだが、じつをいうと銅貨を一枚なくしちゃってね」

「どこでなくしたんだい？」

「おまえさんはさがさなくてよろしいし、みつけたところで吾輩のものなんだけど——まさしくこの木の根っこのところだよ。なんでそこのほうはあんなにガヤガヤしているのかって、さっき吾輩の家主の奥さんにたずねられたので、吾輩はこれからしらべにゆくんだから、じゃあまた」

お日さまが照りつけているっていうのに、ふるいエンジュの木のためとで、けばけばしく化粧をぬりたくった東のうちの嫁と西のうちの嫁とのふたりが勝手にケンカをしている。莫須有先生はただながめているだけでどっちにも味方しない。それどころか、莫須有先生はかたく口をつぐんでしゃべろうともしない。ちょいちょい咳ばらいをするばかりで、というもウカツに野次をとばしたりしようもんなら面倒くさいことになりやせんかと心配したのである。

「あたしにやとっくにお見通しなんだよ、あんたが因縁をつけたがってるんだってことはさ！ 弁償すりゃいいんだろ！ これっぽっちのことくらいで、バカみたいにいきりたって、このあたしにつっかかってくる

なんて！ ——あんたなんかビビるとでもおもってんの？」

「こっちこそビビるとでもおもってんのかい？ ふん、冗談じゃない！ 何様のつもりさ！」

「あんたこそ何様のつもりなんだい！ あんたなんか何様でもなくせに！ ——まったく、ちゃんと鏡をみてごらんよ！」

「あたしが食い意地がはっているっていうのかい！ よそのうちでご飯をつくっているのをみたり、餃子をつくっているのをみたりしたら、すぐに子どもをオンブして手伝いにゆくわよ！」

「へん、くたばったら閻魔さんに舌をひっこぬかれるようなひとつのは、どうしてこうひとに無実の罪をなすりつけたがるんだろう」

おまえさんときたら負け犬根性がしみついているんだねえ、と莫須有先生はこころのなかでつぶやく。こいつらはんみな張飛にハリネズミを売りつけられるみたいにおおかなびっくりで——強気にこられるとビビって買っちゃうってことさ。莫須有先生はせんだって日本人からこの北京語をきいたばかりであって、うまくつかいこなすことができていない。ほくもこういうケンカのとぎにつかうべき言葉なのかどうかはよくわからないが、ともあれひきつづきケンカのありさまをきいてみよう。ひとりがいうには

「あんたは目がみえないの？ みえないんでしょ？ あたしの鬢つけ油をいれた器をひっくりかえしちゃったりしてさ！」

「あたしは目がみえないさ！ みえませんがとも！ だからどうだっていうの？」

「どうだっていうと——いじめてやるのさ！ うちの旦那にいつけてやるわ！」

「あんたの旦那ってのはやり手らしいからいいつけたらいいさ！」

「やり手だからどうだっていうの？ あんたに稼がせてもらったかい？ あんたに食わせてもらったかい？」

これだけは是が非でもたずねておこななくちゃいけないなあ、と莫須有先生はこころのなかでつぶやいた。罵りあうなら罵りあえばよいし、殴りあうなら殴りあえばよいけれども、なんでまた旦那なんぞをもちだしたりして、それでどうなるっていうの？ これさいわいとといった感じでぽっちゃりした女の子がそばにやってきたので、さっそくご挨拶させてもらう。

「お嬢ちゃん、キミもまたケンカを見物しにやってきたの？ うちはどこ？ 名まえはなんていうの？」

9 「梁山伯」とは「相伝為晋会稽人。字処仁。曾与上虞女扮男装之祝英台同学三年。後訪上虞、始知祝為女、求婚不得、憂疾而死。後人入神話、謂祝後嫁馬氏、過梁墓、大慟、墓忽開、祝身随入、同化為胡蝶」(『字源』第3版)。搔い摘んでいうと、男装の麗人・祝英台と梁山伯とがともに学ぶこと三年、祝英台は女身であることを明かさぬまま郷里にもどって馬氏に嫁ぎ、梁山伯は憂い死ぬ。嫁ぎゆく途次に祝英台が梁山伯の墓を通りかかると墓がひらき、祝英台がそこに身を投ずると、ふたりは蝶と化したのであろうか、墓からつがいの蝶があらわれる。

「あたい白ちゃんていうのよ」

「へんなことをたずねちゃうけど、あのふたりのおばちゃんたち——さっき昼寝をしていたときにだれかが鬢つけ油をふるいエンジュの木の下で売っている声がきこえたみたいで、ちょっとおもしろいとおもっちゃったんだけどさ、きっとその鬢つけ油をいれた器のことでケンカがはじまったんじゃないかという気がするんだけど、そうなのかどうかキミはどうおもう？ どっちみちケンカはいけないんだけどね。それくらいなら髪なんてほっときゃよいのにねえ！ そんなことくらいで大騒ぎするなんてさ。ふたりともけばけばしく白粉をぬりたくっちゃって、まあおもしろいといえはおもしろいし、おたがい罵りあうさまはものすごく下品っていうほどじゃないけれども、どうしたって詩的な趣には缺けざるをえないよねえ。あのひとたちはふだんどういうふうなひととなりなのか、キミはなにか知ってるかい？」

「おばあちゃんが今日は学校にゆかなくたっていいというのよ」

「お嬢ちゃん、ちょっとお化粧しているみたいだけど、とってもかわいいね」

「遠くをながめりゃ青い山、近くでうつせば姉妹がふたり、有無をいわせず——ほっぺたパフパフ！」¹⁰

「なんの歌をうたってるの？」

「謎々よ、おばあちゃんがいったんだけど——ほら、やっぱりほっぺたパフパフでしょ？」

「ははそのとおり、お嬢ちゃん——」

「莫須有先生、白ちゃんはかわいいでしょ」

いきなり薄っぺらなおばさんがしゃしゃりでてくる。

「薄っぺらなおばさん、なんでまたあらわれたの？」

「莫須有先生、よくもあたしをダメしてくれたわね、いったい銅貨なんてどこにあるんだい？」

「もし吾輩があなたをダメしたとしたら、あなたの時間をムダにつかわせてしまったことになるけど、なにせ今日はやたらとバタバタしているんなことに気をくばっているヒマがなかったから、ほらご覧なさいよ、あのふたりの嫁さんたちのケンカはいよいよ派手に盛りあがってきているじゃないか」

「おやまあ、ホントだ、なってこったあんたたちふたりって、まるで姉妹みたいになかよしだったっていうのに、いったいなにがあったっていうの？」

「三番目のおばさん、ちょっとみてちょうだい、このひとつたら鬢つけ油をいれた器をひっくりかえしたっていうんだけど、まあたしかにひっくりかえしたのはひっくりかえしちゃったんだけど、こんなにキレルひ

となんでどこにもいなくて、だってまた買えばいいだけだし、それなのにあたしに食ってかかってきて——あたしのせいなの？ あたしがわるいの？ ねえ三番目のおばさんどうなの？」

「吾輩から一言いわせてもらうとして、まずは自己紹介をしておくよ、吾輩は莫須有先生というもので、吾輩がおもうにあなたはおごりたかぶっておられたようだが、さきほどまでいっていたことよりもいましがたいったことのほうが理屈がおとっているようではあるね。ということで薄っぺらなおばさんに公平に判定してもらおう」

「あら、この器はすっかりこぼれちゃったじゃないの！ おや、まだちょっとだけあるわ！」

と薄っぺらなおばさんはのたまう。

ひとりの嫁さんは遠くはなれたところにたたずんで微動だにせず、こういった

「いたい放題にくっちゃべってるけど、どの口がくっちゃべっていることやら——くたばったら閻魔さんに舌をひっこぬかれるわね」

「三番目のおばさん、知らないひとがきいたらあたしがあの一とをいじめたみたいにおもうじゃないの——あなたのような年寄りからみたらあたしがひとをいじめているみたいに見えるの？ ねえおばさんったら、あたしの鬢つけ油をいれた器をひっくりかえしただけじゃなくてあたしが旦那をもちだしてひとをいじめてもいるっていうなんて、うちのひとはもう一週間も帰ってきていなくて、というのはいまではもう警備員じゃなくて警察官になったんだから……」

莫須有先生は大声でどなりつける

「みっともないマネはもうやめなさい！ 涙までながして罵りあうなんて！ こんなふうになるくらいならはじめっからやらなきゃよかったんだ！」

「こんなふうになってなにさ！ はじめっからってなにさ！ あんたこそなんで口をはさんでくるのよ！」

「吾輩はあなたとケンカをするつもりはない、ケンカをする気はさらさらない。さようなら、さようなら」

(2020. 1. 17受理)

10 「遠看青山一座、近看美女両個、若還看得不对、巴掌十七八个」遠くには人間のようすがたをした山がみえ、近くには鏡に映った（本人と映像という）ふたりの美女がみえる。もし見てくれに不満があるなら、白粉を十七八回もバタバタとたたけばよるしい。女性が鏡をみながら顔に白粉をはたいているさま。ひよっとすると東のうちの嫁と西のうちの嫁とがケンカをしているさまをいつているのかもしれない（まさかほっぺたをポカポカなぐってはいないだろうが）。